

ナシ「あきづき」の安定生産のための優良側枝確保技術

ナシ「あきづき」は、新梢伸長停止期前の新梢45度誘引や、予備枝由来の新梢の利用により、えき花芽の着生が向上する。また、無着葉果の満開20日後摘果により短果枝の維持が図られる。主枝の側面～下部から発生した新梢の利用により枝の長大化が抑制できるため、優良側枝を確保しやすい。

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室 (担当者: 加久るみ子)

研究のねらい

「あきづき」は肉質が良く、食味良好で「豊水」や「新高」に発生するような「みつ症」もなく優れた品種として産地への導入が図られている。しかし、「あきづき」は「幸水」に比べて樹勢が強く、新梢が多く発生するが、えき花芽の着生は同様であり、やや悪い。また、結実した果台は、「幸水」同様に翌年の花芽がつきにくく、短果枝維持が困難な方である。安定生産には花芽の多く着生した優良な側枝を計画的に配置する必要があるため、優良側枝を安定して確保する技術を確立する。

研究の成果

1. ナシ「あきづき」は、新梢伸長停止期前に新梢を棚面に対して45度誘引することにより、えき花芽の着生率が向上する。また、誘引することで、基部径の肥大が抑制され、予備枝として利用できる新梢の割合も増加する(表1、図1)。
2. 予備枝から発生した新梢は、不定芽から発生したものに比べて節間が短いため、新梢長が短くなり、えき花芽の着生も向上する(表2)。
3. 主枝の背面および背面から側面にかけて発生した新梢は、側面から下の部位から発生した新梢よりも基部径が大きくなり、長大化しやすいため、側枝に向かない。その傾向は、主枝の基部に近いほど強く現れ、下部から発生した新梢以外は長大化しやすい(図2)。
4. 無着葉果を満開20日後に全摘果した果台は、満開80日後までに果台の陰芽から葉が発生することが多く、盲芽になりにくい(図3)。

普及上の留意点

1. 主枝基部側の背面および背面から側面にかけて発生する芽は、芽かきにより除去する。
2. 主枝の背面および背面から側面にかけて発生した新梢を予備枝に利用した側枝は、長大化しやすく棚付けに手間がかかるとともに、短果枝が伸び出しやすいため、若木では樹形を乱す原因ともなる。予備枝には、側面および側面から下にかけて発生した新梢で基部径が7～12mm程度のものを利用する。

表1 新梢誘引の有無が新梢長やえき花芽率に及ぼす影響

	新梢長 (cm)	節数	えき花芽率 (%)	1節の長さ (cm)
誘引	128	35.2	11.0	3.7
無処理	130	35.5	1.5	3.7
有意性 ^{z)}	NS	NS	*	NS

z) T検定、*: 5%水準で有意、NS:有意差なし

表2 不定芽由来の新梢と予備枝由来の新梢の比較

	新梢長 (cm)	節数	えき花芽率 (%)	1節の長さ (cm)
不定芽	131	35.0	4.7	3.8
予備枝	124	36.0	9.9	3.5

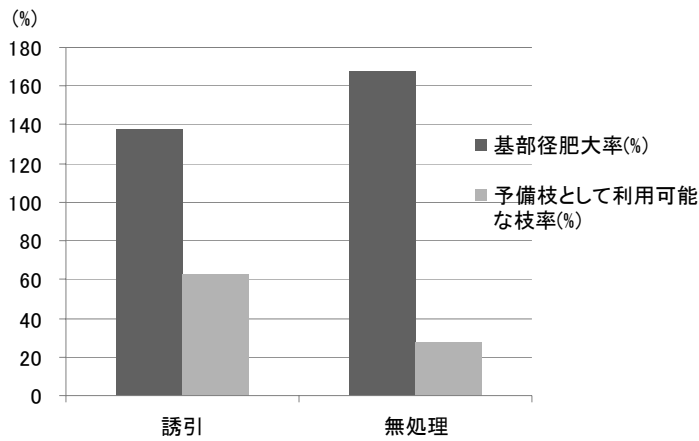


図1 新梢誘引の有無が基部径肥大率と予備枝利用可能枝率に及ぼす影響

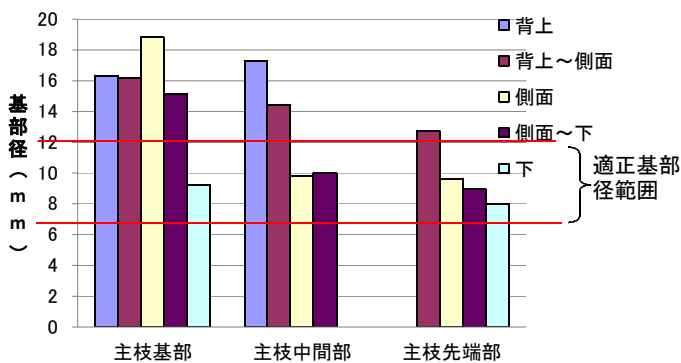


図2 主枝の各位置や部位から発生した新梢基部径の比較

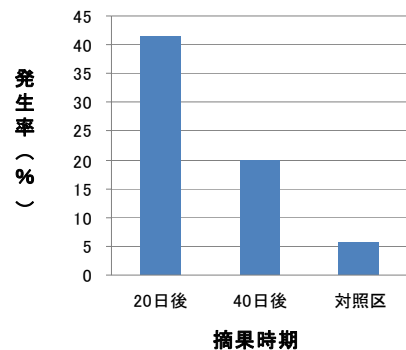


図3 摘果時期の違いが摘果した果台陰芽から発生する葉の発生率に及ぼす影響